

アメリカの働く親から教わったこと —「ワーク・ライフ・バランスは勝ち取るもの」

治部 れんげ

アメリカの働く親に「仕事と育児の両立」について尋ねると、決まって出てくる言葉がありました。それは「交渉」です。

ある女性は大企業の部長職で2児の母。忙しい仕事と家庭生活を両立するため、在宅勤務を「上司と交渉して認められた」そうです。ある男性は物理学者で2児の父。経済学者の妻が出産したとき、半年間の育児休業を取りました。「大学に男性の育児休業制度はなかったけれど、学部と交渉した」と言います。家族の事情に応じた「最適な働き方」を各自が直接交渉によって実現していました。交渉材料は「その方が成果を出せる」という経済合理性に訴えること。60代の女性からは「昇進したかったから、フルタイムで働き、子育てしながら、修士号を取った」という話も聞きました。

労働市場で強い立場を築き、望む働き方を勝ち取る。こうした発想を「新自由主義」と批判するのは容易ですが、私は彼・彼女らから学ぶものが多いと感じました。

16年余りに及ぶ経済記者の経験から、日本の企業に改善点が多いことはよくわかっています。「おじさんの、おじさんによる、おじさんのための企業社会」は持続可能ではありません。でも、変わるべきは「おじさん」だけではないはずです。

留学から帰国して1年後に私自身も出産し、日本企業に残る差別的慣行を実体験しました。「もう、嫌だ!」と思うたび、ある母親の言葉が耳の奥で響きます。大組織で初の管理職になった彼女は、困難に負けず仕事を続けた理由をこう話します。“If I quit, I lose, they win.”（もし私が辞めたら、私が負けて彼らが勝つことになるわ）。

仕事と育児の両立は、優しい政府や雇用主から「与えられるもの」ではなく、自ら交渉し闘って「勝ち取るもの」。アメリカの働く親たちから教わったことは、自らが働く親になった今、より一層、励まされるものとして、しばしば思い出すことです。



PROFILE

じぶ れんげ：昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員、同大学女性文化研究所特別研究員。一橋大学法学部卒業後、2013年まで日経BP社で経済誌記者。2006～07年、フルブライト・ジャーナリスト・プログラムで渡米、ミシガン大学客員研究員。著書に『稼ぐ妻・育てる夫：夫婦の戦略的役割交換』（勁草書房、2009年）、『ふたりの子育てルール』（PHP研究所、2012年）。大学の同級生だった夫と家計と家事をシェアしつつ2歳と6歳を育児中。